

腹部超音波検診（健診）で発見された膵のう胞性病変からの発がん

公益財団法人宮城県対がん協会¹⁾

○手嶋紀子¹⁾、小野寺博義¹⁾、小野博美¹⁾、大水智恵¹⁾、近京子¹⁾、小泉知里¹⁾、新沼紀実¹⁾、
渋谷大助¹⁾

【目的】 腹部超音波検診において膵のう胞性病変はよく発見されるようになってきた。膵がんのハイリスクであるとの報告もあることから、今回我々は膵嚢胞性病変を認めた症例についてその後の発がんについて検討した。

【対象及び方法】 1996年4月から2014年12月までに、当センターのがん生活習慣病健診で腹部超音波検査を施行した述べ84,398名（男性54,665名、女性29,733名）から発見された膵のう胞性病変207例（男性104例、女性103例、平均年齢59歳）を対象とし、地域がん登録との照合により発がんの有無を調査した。地域がん登録は2014年12月までのデータを用いた。また、膵嚢胞性病変を指摘された207例のうち精検該当になり結果が判明している185例について検診後の精検の診断結果を集計した。

【結果】 がん登録との照合の結果、膵のう胞性病変を指摘された207例の中から2例の膵がんが発見（検診から1年後および14年後）されていたがその詳細は不明である。

精検による診断は膵のう胞85例、IPMN25例、膵腫瘍1例、その他所見7例、異常なし67例であった。そのうち、超音波内視鏡（EUS）で精検を行った89例での診断は膵のう胞52例、IPMN20例、膵腫瘍1例、その他所見5例、異常なし11例であった。EUSを用いなかった精検では膵のう胞33例、IPMN5例、その他所見2例、異常なし56例であった。また、IPMN25例のうちEUSで診断されたのは20例、80.0%であった。

【考察】 検診で発見された膵のう胞性病変からの膵がん発生率は10万人対966.2人（0.97%）であり、国立がんセンターがん情報サービスのデータによる粗罹患率（人口10万人対、2013年）男性29.8人、女性25.0人に比べて遥かに高率であった。検診で発見された膵のう胞性病変は膵がんのハイリスクであると考えられ、厳重に経過観察すべきである。

また、膵がんと強い関連があるIPMNの多くはEUSで診断されており、膵のう胞性病変があった際にはEUSによる精検が重要と思われた。